



## 総長回章 第三号

---

“お言葉どおり  
この身になりますように”  
マリアと共なる従順の中に

---

マヌエル・ホセ・コルテス、SM  
マリア会第十四代総長

2009年4月12日  
主のご復活の祭日

## 目次

I.	キリスト教生活の根底にある従順	5
1.1	キリストにおける救いの秘義の根底にある従順	5
1.2	キリスト教信仰を生き抜く根源に繋がる従順	8
II.	神のみ言葉への従順によって、その従順を求めて生きる	12
2.1	“他者”の言葉によって生きるとは？	12
2.2	御父の口から出るすべての言葉に注意深く	20
A)	探し求めること	21
B)	耳を傾けること	23
C)	識別すること	25
III.	共に神のご計画を求める	30
3.1	“共に一呼び寄せる”(召集する) 従順	30
3.2	修道会のカリスマ — 神への従順の媒介	34
3.3	分かち合う従順、“共同一責任”	37

## “お言葉どおり、この身になりますように”

### マリアと共なる従順の中に

親愛なる兄弟の皆さん、

これまでの二つの回章で私が描いてきたマリアに関する黙想の流れに沿って、今回の回章では、私は皆さんに、神の名において問いかけた天使に向かってマリアが述べた：「お言葉どおり、この身になりますように」（ルカ 1：38）という答えに思いを馳せることを提案いたします。

これこそ神が彼女から期待していた答えです。返答を受け取り、使命を果たした神の使いは“去って行きました”。父と子と聖霊の三位の神は、望んでおられたもの、そして、逆説的な言い方ですが、“必要としておられた返答”、即ち、神の救いの計画に対する心身両面の無条件の奉仕、忠実な協力、完全な明け渡しを人間から得られたのです。マリアは神のご計画に対して無条件の奉献をしたのです：「お言葉どおり、この身になりますように」。

マリアのこの言葉の中に、それ以後のすべての神への奉献行為が、従って、特別な形で私たち自身の修道誓願も、常に組み込まれているのです。私たちが誓願のときに公式に誓約するのは、マリアの返答と同じように、神の言葉が“私たちの中に実現するように”、私たちの全存在、全生涯を捧げるといふ誓約以外の何ものでもありません。こうして、神の国は私たちの中に現実のものとなり、世の救いのために“神の国が到来する”ようになるのです。

それで、マリアの言葉の持つ意味を深く究めるよう皆さんにお勧めしながら、私たちの修道生活を規定している奉献の光に照らしつつ、私たちの生活を考えてみたいと思います。私たちの生活は神の言葉がその中に受肉したものとなるように奉献されています。この事実は私たちの

日々の生活においてどんなことを示唆しているのでしょうか？ 私たちは本当にこのことを意識しながら毎日を生きているのでしょうか？ 私たちは神の計画を実現するために修道生活を選んだのでしょうか、それとも、私たちの個人的、あるいは、集团的計画を実現するためだったのでしょうか？ 神のご意思に対して私たちはどのように本当に自分を開いているのでしょうか？ 今、ここで神が私たちに語っておられる言葉に、どのように耳を傾けることができるのでしょうか？ マリアのこの言葉を具体化するとは何を意味しているのでしょうか？ その実現のために私たちの生活のどの側面に注意を払わねばならないのでしょうか？・・・

これらの質問やその他の同様な質問が今日の修道生活についての私の多くの懸念の根底にあります。(上記のような質問に対して) 考えられる答えにもまして私が懸念するのは、現在修道生活の中で繰り返し問われている質問の中に、上に述べたような質問が、個人的にまた共同体としても、ほとんどなされていないか、もしかしたら、完全に欠けているということです。これらの質問が私たちの奉獻の根幹にかかわるものである以上、絶えず私たちに問いかけて止むことのないものであって然るべきではないのでしょうか。私が今皆さんと分かち合うこの考察に目を向けることによって、少なくとも、私たちが内的生活を回復し、健全な関心と呼び起こし、そして結果的に、私たちの中に何らかの考察、意見の交換、対話を生み出す助けとなるよう私は願っています。これらはすべて間違いなく、私たちの修道生活を強化し、再活性化することに寄与するでしょうし、修道生活を真に生き生きと保つための私たちの努力が低下しないように助けてくれることでしょう。このようにして、私たちの修道生活の豊かさが私たちと世界に示されるのです。他方、修道生活の未来は、その修道生活が本物であるかどうか、また、活力をもって実践されているかどうか大きく依存していることを忘れてはなりません。

私は今回の回章に、『マリアと共にキリストの中に』、『マリアと共なるミッションにて』と題したこれまでの二つの回章に続いて、『マリアと共なる従順の中に』という副題をつけましたが、それはマリアニストの修道生活という観点を見失わないためです。私たちはこのマリアニスト

修道生活において“マリアとの契約により、信仰のうちに多くの人々を長子たるイエスに形づくるマリアの使命にあずかり、マリアを助けるよう努める”<sup>1</sup> のであり、また、私たちのマリアニスト修道生活は、あらゆる面でマリアと一致して生きることを要求しているのです。このあらゆる面の中で、論理的に最も基本的で基礎となるもの、他のすべての面の支えとなっているもの、それは、マリアがなされたように、神のご計画に対する徹底的な従順の中に、自分の生命を委ねることです。こうすることにおいてのみ、私たちは、神がマリアに託した使命において、真のマリアの協力者となることができます。もしマリアが神のご計画における自分の使命に完全に入ったのがこのドア（このような従順）を通してであったとすれば、それはまた同様に私たちの通るドア（道）でもなければなりません。

私はこの回章の考察を次の三つの大きなテーマに分けてみました：

- I. キリスト教生活の根底にある従順
- II. 神のみ言葉への従順によって、その従順を求めて生きる
- III. 共に神のご計画を求める



## I. キリスト教生活の根底にある従順

### 1.1 キリストにおける救いの秘義の根底にある従順

神の救いへの招きに対して人類のドアを開くのはマリアの従順であり、この救いへの招きを完成にまで導くのはキリストの従順です。これは、神の側からは愛の計画と憐みの間に見られる完全な一致の実りとし

---

<sup>1</sup> 『生活の規則』第6条。

て、人の子であるキリストの側からは従順の實りとして、新約聖書が私たちの救いの秘義の持つ力を私たちに提示する仕方です。「一人の人の不従順によって多くの人が罪人とされたように、一人の従順によって多くの人が正しい者とされるのです」(ローマ 5:19)。

従順は、受肉において、また同様に、特にキリストの死と復活において、人類のための神の救いの計画をそれぞれ開始し、完成する出来事として中心的な役割を演じています。

— 受肉は[従う人] *homo oboediens* の出現をその目的としています。ご託身において御子は人間性に固有な身体を引き受けますが、それは、彼を通して人類が従順のうちに自分を神に捧げ、それにより聖化されるためです。「キリストは世に来られたときに、次のように言われたのです：“あなたは、いけにえや捧げものを望まず、むしろ私のために体を備えてくださいました。あなたは焼き尽くす捧げものや罪を贖うためのいけにえを好まれませんでした。そこで私は言いました。「御覧ください。私は来ました。聖書の巻物に私について書いてあるとおり、神よ、み心を行うために……このみ心に基づいて、ただ一度イエス・キリストの体が捧げられたことにより、私たちは聖なる者とされたのです」(ヘブライ 10:5-7, 10)。

— 「できることなら、この杯をわたしから過ぎ去らせてください。しかし、わたしの願いどおりではなく、み心のままに」(マタイ 26:39) という御父へのキリストの懇願の祈りに倣うことによって、人類の従順な奉獻は、キリストの死に際して、すなわち、御父によるキリストの決定的な高挙を前にした最終段階で、その頂点に達します。「キリストは自分を無にして、僕の身分になり、人間と同じ者になりました。人間の姿で現れ、へりくだって、死に至るまで、それも十字架の死に至るまで従順でした。このため、神はキリストを高く上げ、あらゆる名にまさる名をお与えになりました」(フィリピ 2:7-9)。「キリストは、肉において生きておられた時、激しい叫び声をあげ、涙を流しながら、ご自分を死から救う力のある方に、祈りと願いとをささげ、その恐れ敬う態度

のゆえにききいれられました。キリストは御子であるにもかかわらず、多くの苦しみによって従順を学ばれました。そして完全な者となられたので、ご自分に従順であるすべての人々に対して、永遠の救いの源となられました」(ヘブライ 5:7-9)。

キリスト教生活における従順とその位置についてのあらゆる考察と論議は、ここから、すなわち、キリストの従順と、その従順がキリストの生涯において持っていた意味、従って、それが私たちの生活に持っている意味、の黙想から出発しなければなりません。

キリストの生涯にはただ一つの目的しかありませんでした：それは御父のみ旨を求め、それを行うことです。これこそ彼を支える食べ物です(ヨハネ 4:34；マタイ 4:4 参照)。石をパンに変えれば彼の飢えを満たすことになるでしょうが、それは彼の存在の根源そのものを切断することになってしまいます。彼の力、その並はずれた力は、父なる神への彼の絶対的な依存からくるのです。もし彼がただの一瞬でも御父から離れるようなことがあれば、彼は完全な孤独となってしまうでしょう。

「あなたたちは、人の子を上げたときに初めて“わたしはある”ということ、また、わたしが、自分勝手には何もせず、ただ、父に教えられたとおりに話していることが分かるだろう。わたしをお遣わしになった方は、わたしと共にいてくださる。わたしをひとりにしてはおかれぬ。わたしは、いつもこの方のみ心に適うことを行うからである」(ヨハネ 8:28-29)。御父のみ旨は嫌悪を催す杯のように彼に現われるかもしれませんが、その杯が父の手から来た瞬間から、それは生きる水へと変容するのです。この杯を拒絶することは渴きで死ぬこととなります。

「剣をさやに納めなさい。父がお与えになった杯は、飲むべきではないか」(ヨハネ 18:11)。「今、わたしは心騒ぐ。何と言おうか。“父よ、わたしをこの時から救ってください”と言おうか。しかし、わたしはまさにこの時のために来たのだ。父よ、み名の栄光を現してください」(ヨハネ 12:27-28)。

イエスは、従順に依らなければ、自分が自分であること、すなわち、

御父の愛する御子であることができません。もしも彼に御父からのものではないほんの些細なそぶりの余地でさえそれがあるとすれば、それは彼の全存在を裏切ることとなるので、そんなことは彼にとって全く考えられないことです。「子は、父のなさることを見なければ、自分からは何事もできない」（ヨハネ 5：19）のです。このように、御子としてご自分を現す至高の行為は、また、彼の従順という至高の行為でもあるのです。神の子という称号は、それが十字架上で真正なものとされる時まであいまいなままであり、キリストは自分にこの呼び名を与えようとする人々に口を閉ざすよう命じるのです。真の神の子としてのこの称号が啓示されたのは、キリストご自身の力によってではなく、むしろ、親子関係全体が生じる御父への徹底的な従順を通してであったのです。

## 1.2 キリスト教信仰を生き抜く根源に繋がる従順

もし神の御子が人となったのであれば、それは一人ひとり人間が神の子となるためです。もし御父に対する御子の愛が従順の中に表明されるとすれば、それは、私たちの愛もまた同様に従順の中で表わされるためです。

他方で、キリストにあっては、御父との関係は本質的、直接的なものであるのに対して、私たちの場合は、キリストによって仲介された関係です。私たちの御父との出会いはイエス・キリストを通して実現されます。イエス・キリストにおいて、キリスト者は“御父を見”（ヨハネ 14：9）、また、御父と直面するのです。とはいえ、この出会いは“信仰の暗夜”の中で生じるのです。キリスト者は、はっきりとした理解に到達する以前であっても愛に満ちて信頼する、そのような信仰においてキリストに属しています。信仰に動かされて、その人は自分の人生をキリストのみ手にゆだね、徹底的な従順の行為において自分自身の意思に従うという欲求を捨て、最終的に御父へ、キリストのうちに御父へと向かうのです。従順は信仰というよりも、むしろ具体的な生活における信仰の表現です。従順がなければ、信仰者は信仰者として生きることはなく、彼



の信仰は空虚な感情以外の何ものでもないでしょう。

キリスト者は、キリストのように、従順な者として定義されます。キリスト者の生活における疑問の余地のない愛の首位性は、そのような愛が、キリスト・イエスにおいて顔と名前を持つようになり、“従順”となったということ、私たちに忘れさせるものではありません。従って、従順は屈辱ではなく真理であり、その従順の上に人間の満ち満ちたいのちが築かれ、実現されるのです。そのため、信じる者は御父のみ旨を実現しようと熱烈に望み、そのみ旨を自らの最高の希求とします。イエスのように、このみ旨によって生きたいと願います。(・・・)しかしながら、すべての従順の模範である以前に、キリストは、すべてのまことの従順がささげられる方です。実際、キリストの言葉を実践することによって人は弟子になり(マタイ 7:24 参照)、その掟を守ることによってキリストへの愛が具体化され、御父の愛を引き寄せることとなります(ヨハネ 14:21 参照)。キリストは、仕える方として修道共同体の中心におられますが、(ルカ 22:27 参照)、私たちが自らの信仰を告白する相手である方として(「神を信じなさい。そして、わたしをも信じなさい」ヨハネ 14:1)、また私たちが自らの従順をささげる方としても、共同体の中心におられます。なぜなら、そうしてはじめて私たちは、確かに、堅忍のうちに従うことができるからです。「実際、たどるべき道を指し示されるのは、ご自分の名によって集う兄弟姉妹のうちに新たに共におられる、復活された主ご自身なのです」。<sup>2</sup>

旧約から新約に至る救いの歴史全体を通して、従順は信仰と不可分に結ばれた信仰者の特徴的な態度として現われます。本物の信者は徹底的に従順です。彼らの信仰は、神のみ言葉とご計画に対して自分の生涯を委ねることとして示されています(ヘブライ 11 参照)。私たちキリスト者は、これら信仰の“証人たち”の中でも、信仰の源、全ての信仰者の母にほかならない女性に自分たちが特別な形で伴われ、教えられ、力を

---

<sup>2</sup> 奉獻・使徒的生活会省よりの指令『権威の奉仕と従順』(Faciem tuam) 2008年5月11日、n. 8。

与えられていると感じています。

マリアの従順は、彼女の信仰から流れ出たものであり、“お言葉どおり、この身になりますように”という言葉の中に表明されているのですが、それは御子への従順です。マリアは御子の最初の弟子でした。彼は彼女にとっても神の“み言葉”でした；彼こそ、彼女にとっても、まさに“父への道を示すその方”だったのです。マリアの信仰は、イエスの従順と一致しているので、御子の小道を受け入れること、つまり、御子に従順につき従うことにおいて成長し、力あるもの（effective）となるのです。これはルカ福音書の第 2 章に目を通すだけでよく分かります。ナザレトからベトレヘムへ、ベトレヘムからエルザレムの神殿へ、エルザレムの神殿からナザレトへ、そしてナザレトからまた神殿へと、彼女は行ったり来たりします……。実際にはこの道筋を定めるのは彼女ではありません。その途上で、そしてその道筋で発生してくる出来事においては、マリアは、かつてお告げ・ご訪問・マグニフィカトの三場面でそうであったように主役ではなく、主役は今度は御子です。その道筋は御子のそれなのです。御子は、御父への従順の中にこの道を辿っていきますが、この父が“陰の運転者”なのです。マリアもまたこの道を辿るのですが、マリアは御子に従います。御子自身従っておられますが、マリアも、十字架にいたるまでのイエスの生涯においてずっと絶えず神のみ旨を見出しながら、また、御子とともにこの人生の道筋のまさに頂点である過越しの秘義を体験しながら、御子と一致して従っておられるのです。

マリアの従順は彼女の信仰から流れ出てきます。その従順は“彼女が知っていること”からではなく、むしろ、彼女の信仰の確信からくるものなのです。マリアが従順なのは、事前に神のご計画を知っているからではありません。マリアは信頼するが故に従い、自分自身を御子のみ手に委ねるのです。マリアの中心的な支えはその信仰です。私たちすべての人間に固有なある種の知識のあいまいさを前提にしなければ、このよ

うなことはあり得ないでしょう。<sup>3</sup> 信仰者が自らを委ねる秘義は、その人がその秘義に入る時にだけ明らかにされるのであり、人がそこに入ることができるのは、私たちがイエスにおいて見たように、従順というドアを通してだけなのです。信仰は秘義を洞察する望みを引き起こします。従順は、秘義が私たちのまさに眼前に出現し、示され、見えるようにしてくれます。ルカは、マリアが自分に起こった出来事に直面して“驚き”（2：48）、“不思議に思い”（2：33）、“当惑する”（2：50）姿を示し、また、その無知を御子に咎められたこと（2：49）を描きながらも、他方、“これらすべてのことを心に納め、思いめぐらしていた”（2：19；51）ことも示して、マリアにおける“信仰の従順による啓示”のプロセスを私たちの前に見事に展開してみせています。<sup>4</sup>

---

<sup>3</sup> マリアの信仰者としての歩みについて、ヨハネ・パウロ二世は次のように書いています：「この福音の始まりのなかにはある種の心の苦悩がみられます。それは、十字架の聖ヨハネの言葉を借りて言えば、“信仰の暗夜”が“とばり”のごとく広がっていて、それを通してしか、かなたにおられる“見えざる御者”へと近づけず、秘義に親しめないことです。（・・・）イエスは、「父のほかには、子を知る者はない」（マタイ 11：27 参照）と承知していましたが、その母マリアは、イエスが神の子であるという秘義を誰よりも深く知らされてはいたものの、ただ信仰によってのみこの秘義に親しんでいたのです。マリアが同じ屋根の下で、御子のそばに身をおき、御子と一致を保ちながら、「信仰の旅路を進んだ」ことを公会議は強調しています」（『救い主の母』(Redemptoris mater)、n. 17）（第二バチカン公会議の『教会憲章』(Lumen gentium)、n. 58 参照）。

<sup>4</sup> 信じるとは、いかに「神の定めは悟りがたく、その道はきわめがたい」（ローマ 11：33）かを謙虚に認めつつ、生ける神の言葉の真実に「身をゆだねる」ことです。マリアは、いと高き御者の永遠のご意志によって、いわば、この「悟りがたい定め」と「きわめがたい道」の真ん中で、「信仰の暗夜」に包まれながらも、心を開いて、神のご計画にあることすべてを完全に受け入れました。お告げで、マリアが、その母となり、「その名をイエス（救い主）と名づけよ」と言われた子について聞かされたとき、さらに、「神である主は、彼にその父ダビデの王座をお与えになり、彼はヤコブの家をとこしえに治め、その治世は限りなく続くでしょう」（ルカ 1：32-33）とも告げられます。今までイスラエルの民はつねにこのことに希望をつないできました・・・このとき、マリアは信仰で「メシアである王」の母となることを感じ取っていたかもしれません。彼女は「わたしは主のはしためです。お言葉どおり、この身になりますように」（ルカ 1：38）と答えます。マリアは、実に最初の瞬間から、何よりもまず「信仰による従順」を表明します。神ご自身が天使を通して告げられた言葉にどん

マリアと共に、そして私たちに先駆けてこの信仰の道を辿った人々と共に、信仰者とは、人となったみ言葉であるキリストの中に示された神のご計画の秘義に魅了されて、信仰の故にキリストに自らを委ねる者である、ということを私たちは学びます。そして、信仰者は従順によってキリストの中に自分自身を没入させることによって、キリストに属する者となり、キリストを宿し、キリストを言わば“誕生させる”のです。このようにして、私たちは「神のみ心を実行する者は誰でも“私の兄弟姉妹”であるだけでなく、“私の母”でもある」(マルコ 3:35 par.)というキリストの言い方を理解できるのです。聖アウグスティヌス、聖ベルナルド、その他の人々により繰り返し引用されている言葉ですが、オリゲネスは次のように自らに問いかけています:「キリストがベトレヘムでマリアから生まれることは、もし彼が信仰によって私の魂の中にも生まれるのでなければ、私にとって何の役に立つだろうか?」。聖アンブロジオは書いています:「信じる魂は誰でも全て神のみ言葉を宿し、生むのです。肉によればキリストの母はただ一人しかいませんが、信仰によれば、全ての魂は、神のみ言葉を受け入れる時、キリストを生むのです」。<sup>5</sup> 従って、信仰によってキリストを宿しながら、従順によって“彼を生まなければ”、世の救いのために受肉を待っておられる神のみ言葉を、信仰者の心の中で流産させることと等しいことになってしまいます。

## II. 神のみ言葉への従順によって、その従順を求めて生きる

### 2.1 “他者”の言葉によって生きるとは?

従うということは他者の意思を実行することです。これは、自分自身

---

な意味があろうとも、それに身をゆだねるのです。(『救い主の母』(Redemptoris mater)、nn. 14–15)。

<sup>5</sup> Exposition of the Gospel according to Luke ( Expositio Evangelii secundum Lucam ), II, 26.

の望みを他者の望みに合わせることで、没個性化にならないでしょうか？自由に反することではないでしょうか？現代世界にあって、ひとつの価値として従順を生きることは可能なのでしょうか？

「従順がすべてのキリスト者の生活の中で占める中心的役割は、教会を含む今日の文明が従順について見当はずれなことを考えたり、的はずれな形で従順を生きているのとは全くコントラストをなしています。あるカトリック・グループでは、従順を何かを拒絶する態度で見ているような印象を与えますが、多分それは、彼らが従順を何か自由、自立、個人の良心に従うことなどの基本的な人間の価値に反するものと見ているからです。このことに含まれているのですが、証しをする面から見て、少々大げさになりますが、清貧が（時には一方的に）最も評価され、貞潔は（いつも正しく理解されているわけではありませんが）称賛され、そして従順は軽蔑されています。多分これは普通のことかもしれませんが、にも関わらず、私たちは力を込めて‘もしも清貧が証しをするための優先事項をなすとすれば、従順は証しをする人に関わる最優先事項であるべきだ’と言わなければなりません」。<sup>6</sup>

事実、私たちがイエス・キリストとマリアの中に見てきたように、証し人とはどういう人かを定義づけるものは従順です。しかしながら、現代世界の文化的風潮とでも呼べるものの渦中において、キリスト教生活と修道生活に固有のこの従順を生きることは易しいことではありません。この風潮には、人は自分自身で自分になるという思想が根底にあり、そしてこの思想は、少なくとも、自由は自立と同じであるという思想と繋がっています。結果として、また人間が他者を必要とすることが事実である以上、この必要から生じて来る“依存”関係は、自分の望みを満足させ、自分の個人的計画を実現するのに役立つ場合にのみ受け入れられるのであって、決して他者の望みや計画を実現するためではない、ということです。そしてこのような思想の対極にあるものは隷属、および、

---

<sup>6</sup> サレジオ会総長、総長会会長の Fr. Pascual Chávez, SDB による 2008 年 5 月 30 日、“71 回目の半年ごとの総長会”での終結のときの発言。

自主性の喪失と同義語ということになるでしょう。別言すれば、今日、（社会秩序が保たれ、予定された行動が効果的であるために必要とされる）“機能的”とでも呼べる従順が広く行き渡り受け入れられていますが、私たちが“実存的”とでも呼べるタイプの従順、そこで一人の独自の生活が築かれ得る従順は拒絶されるのです。しかしながら、私たちが（“私の食べ物は御父のみ心を行うことである”）といわれるキリストの中に、また（“お言葉どおり、この身になりますように”）といわれるマリアの中に見るのは、まさに後者のタイプの従順であり、私たちが誓願で誓うのはこのタイプの従順なのです。

以上の観点から、従順をゆがめたりその意味を裏切るような逸脱に陥ることなく、私たちは上述のような現代の状況の中で従順を正しく生きるために明確な理解を持たねばなりません。もし私たちが正直であれば、周囲の文化的状況を吹き込まれた利己的な自己充足が、無意識の中に私たちの毛穴にしみ込むことになると認めなければなりません。このようにして、どうしてそうなるのか知らないままに、修道者でありながら、私たちの職業上の任務が許してくれさえすれば、共同生活の“規制”から離れて、“バカンス”と呼ばれる日々を過ごすことを密かに夢見ている自分に気づきます；あるいは、どんな共同生活、どんな共同事業にも必要不可欠である『生活の規則』が求める最低限の要求だけは満たしながら、それ以外は、誰にも報告する必要がなく、何でも自分がしたいことができる自由がある — もっと“自分自身”であることを見出す必要があるという口実のもとにすべてがある — そのような共同体を熱望している自分に気づきます。換言すれば、私たちは、まるで従順を回避することによってだけ“私たち自身”になれるかのように、現代世界が求めるのと同じやり方で“もう少し自由になる”ことにあこがれている自分を見出すのです。それに気づかないままに、私たちは、すべて権威というものは私たちの人間的成長を阻害するものだという思想に汚染されているのです。それ故、私たちは従順を“ことがうまく機能する”ために必要なものとして受け入れるのであって、従順が私たちの人生を真の開花に導くからではないのです。

周囲の文化が私たちに突き付ける第一の危険は、まさに、人間生活における権威についての真の意味の喪失にあります。この危険に関しては長期間にわたる幅広い経験があり、私たちの過去でも会の総長たちが取り扱った従順の誓願についての回章の中で繰り返し分析されています。既にカイエ総長は、当時としてはまだ身近なものであったフランス革命の経験をもとに、当時の状況の中で吹きまくり、権威の土台を掘り崩していた独立の風潮を嘆いています。<sup>7</sup> 19世紀末に、シムレル総長は、この傾向が私たちの生活における神の権威そのものの承認まで損ないかねないと警告し、教皇レオ13世の社会教説の流れに沿って、権威の神的基礎とその概念を説明する深い内容の長文の回章を著わしています。<sup>8</sup> その後、20世紀に入りかなり経ってから、キーフェル総長もまた、1934年の総会でなされた依頼に応じて、前任者が既に取り扱った権威の基礎から直接に生じる従順の誓願について回章を書き、次のように述べています。「現代世界は権威の危機に苦しんでいる・・・そしてその相方が従順の危機である、と至る所で言われています」。<sup>9</sup> 第二次大戦の後、<sup>10</sup>

---

<sup>7</sup> 「18世紀の哲学が、自由という偉大な言葉を好餌として人々に撒きながら、詭弁と嘲りをもって、権威の土台を崩し始めて以来、現代世代の上に独立の風が吹き荒れているようです。この哲学にとって自由とは言いたいことを言い、やりたいことをやるという抑制のない我儘にすぎなかったのです」(カイエ総長『従順の誓願』回章第52号、1859年3月28日)。

<sup>8</sup> J. シムレル総長、『権威についての訓話』、回章第68号、1896年3月25日：「政治集会、討論、あるいは単なる会話にあっても、ほとんどの人は、人間が人生の終わりに自分の生涯について誰にも報告する必要のない、自分自身の完全な主でもあるかのように；また、権力が、人間を超える権威からではなく、員数、力、手練手管、成功から来るものであるかのように；また神が存在しないかのように、あるいは人間に関わることについて完全に無関心であるかのように語り、理屈を述べることは私たち皆が知っている通りです」(n. 3)。「教会は神の唯一の至高性を守るため、君主制の至高性を、そして同じ権利、同じ理由により人民、群衆、員数の至高性を拒否します」(n. 86)。

<sup>9</sup> F.J. キーフェル総長『従順の徳と誓願について』回章第3号、1935年1月22日。回章の序文でキーフェル総長が示す記述は興味深く、時宜を得たものです：「現代世界が権威の危機に苦しんでいると至る所で言われています。権威は自分の資格、少なくとも現代世界から認められうるような資格を示すことに困難を感じており、その跳ね返りが従順の危機となって現われています。」

ジョルゲンス総長、そしてホッフエル総長も同じ主題で回章を著わしています。<sup>11</sup>

過去 2 世紀に及ぶ権威に関わる危機的緊張状態が、遠い昔の、また、それほど遠くない過去に見られる恐ろしい記憶を残した、宗教的なものを含む、あらゆる種類の権威主義に対抗するものとして、人格の尊厳とその結果としての人間の自由と自律に当然帰すべき尊敬という主義に沿って建設的な効果を生み出したことは疑いようのない事実です。とは言え、抑圧的で人間疎外的な権威の遂行を拒絶することが、権威そのものの拒絶と、それに続く自立した個人の独立という主張へと変わっていく時、事態は危険なものとなります。

---

命令の価値とそのよって立つ基礎が何処でも自由に議論的となり、そして最後には、目下は、自らの態度を明確にしない権威を前にして、自分の望みを権威に押しつけようとして、反抗するか、または動こうとしないのです。

以上に述べた危機は家庭内の権威までも巻き込んでいて、子供たちの要求を前に妥協してしまった両親たちが、敗北を認め、余りにも早く親権から自由になってしまった子供たちを引き受けてくれるよう私たちに依頼に来る経験が私たちには少なくありません……。この危機はさらに政治的権威にまで及んでいます。……。あらゆる面が批判の対象となり、権威の代表者たちは世論のレベルで論評されかねません。そして、もしあらゆる種類の風刺が、公的な立場にある人がまだ行使しようとする権威は何であれ葬り去ろうとする論争に持ち込まれなければ、それはまだしも幸運なことだといえるのです。権威の危機にあっては、若者が直面する腐敗のリスクは更に大きいという事実を付け加えねばならないでしょう。「人は 20 歳で革命派、40 歳で保守派」と言われてきました。それは、人生を踏み出すと、若者は自分が無限の可能性を前にしている、と感じるからで、彼は自分の試みるあらゆる経験で人生を豊かにすることができると思うのです。そこから容易に自立への熱狂と共に、自由を束縛するすべて、いわゆる人格の開花を妨げるものへの苛立ちが生じます。その後、人生の現実との摩擦、時には厳しい経験や見込み違いがいくつもの幻想を追い払い、より落ち着いたペースを生みだし、真に必要と認められた規律の受容へと導いていくのです」(キーフェル総長、回章第 3 号 (1935 年 1 月 22 日)、37～38 ページ)。

<sup>10</sup> S.J. ジョルゲンス総長『従順の困難』回章第 29 号、1955 年 3 月 28 日。

<sup>11</sup> P.J. ホーフエル総長『修道者の従順』回章第 9 号、1959 年 5 月 12 日。



主体的個人を重視する西洋社会の文化は、人間の尊厳を尊重する価値観の広まりに貢献し、人の自由な成長と自立性を建設的に促進してきました。

このような人間の尊厳の認識は、現代の文化の最も顕著な特質の一つ、摂理的に与えられたものですが、そのため、権威についてとらえ、権威と関わるための新しい方法が必要になります。同時に、自由がひとり歩きをし、人間の自立が創造主からの、他者との関係からの独立に傾くならば、私たちは偶像崇拜のさまざまな形を前にすることになり、それは自由を増すよりも、むしろ私たちを隷属状態をつくるものになるということを念頭におかなければなりません。

そのような場合、アブラハム、イサク、ヤコブの神、イエス・キリストの神を信じる者は、あらゆる偶像礼拝から自らを解放する道を歩みはじめなければなりません。その道は、出エジプトの体験のうちにその原動力を見いだすことのできるものです。一般的な散漫なものの考え方の受容から、主につき従う自由へ、ものごとを決まった視点からだけ見る単調さから、生ける真の神との交わりに人を招き入れる旅路へと至る、解放の道です。<sup>12</sup>

私たちは、人間が関係の存在であり、関係において人間となるのであって、独立においてではないことを知っています。私たちは、今、自分が生きており、今まで生きてきた、そしてこれから生きるであろう様々な関係の結実です。このように断言するとき、私たちは表面的で単に偶発的な関係のことではなくて、“基礎的”とでも呼べる関係、私たちを人格として形成する関係のことを述べているのです：これまで開放してくれたし、今も開放してくれる関係、私たちの中に単に本能的なものをはるかに超えた人間存在としての最高の自分自身を花開かせる関係がありますし、また、恐らく、これまで抑圧的で人を疎外する関係もあったでしょうし、今もあるでしょう。しかしながら、確かなことは、良かれ悪しかれ、これらの関係なしには、私たちは今の自分ではあり得ないだろうということです。関係はそこにあり、今後とも、あり続けるでしょう。

---

<sup>12</sup> 『権威の奉仕と従順』 (Faciem tuam)、n. 2。

関係は避けられないものです。もしも誰かが、自分はこれらの関係によって自己形成などされない、と言うのであれば、それは彼が自らの人生の現実を今なお深く理解しなければならない者であるか、あるいは、このような関係が存在することを充分にはっきりと認識するまでに達していない者であるということです。

人格の形成と発達において本質的であり、避けられないこれらの“基礎となる”関係が、権限を備えて私たちの生活に取り入れられるその権限こそ、私たちが権威と呼んでいるものです。幼年期にあって、また、一つひとつの幼児らしい生活態度においては、権威は外部から課されるものとなり、これらの“基礎となる”関係は受動的な形で生きられます。しかし、それは、一人の人間の生活を制約するあらゆる関係を拒絶することが成人にふさわしいことだ、ということの意味するものではありません。成人に相応しいことというのは、これらの関係を意識し、その中にある“権威”を見分け、価値のない関係を避け、その人が真に持つべき関係に入ることです。人が幼児期の依存から解放され、自分の人生を自分の手にする時、彼が直面するチャレンジは、自分の人生を成熟に導くであろう“基礎となる”関係に、意識的にまた自由に、それを委ねていくことに存するのであり、発生してくる種々の関係から自らの人生を単に“無菌に保つ”ことに存するものではありません。「自分の生命を守るものはそれを失う」と御主は言われました。ですから、人格の完全な成熟はあらゆる“権威”の拒否にではなく（結局のところ、意識するかどうかに関わらず、私たちは生涯を通じて、何らかの権威に“服している”のです）、私たちの人生を真の豊かさに導くものを正しく承認することの中にあります。

「私のために自分の命を失う者はそれを救う」と御主は続けられました。御主のみ心を行うために自分の生涯を御主の手にゆだねること、つまり、御主との関係を自分の人生の真に“基礎となる”関係とすることが、自分の生命を完成に導くことである、と信仰者は知っています。それは、彼が御主の中にただひたすら他者の善を追求するユニークな権威を見出してきたからです。すなわち、その権威とは、服従させることな

く課され、力づくで支配することなく要請し、何も見返りを求めないで与え、他者の自由を常に尊重するような権威のことであり、つまりそれは、純粹な愛の権威のことです。ホーフエル総長は書いています。「キリストの模範に倣う弟子であるためには、修道者は自分の生命までも喜んで捨てなければなりません。彼が期待できる唯一の成長は、神の愛における成長です。これはすべて密接に結びついています。この愛は彼のあらゆる能力を統合するので、あらゆる点での成熟に向けて彼を成長させます。それは、ちょうど唯神だけを探すために自分の人間的な個性をなんの未練もなく完全に犠牲にした聖人方のように、あらゆるレベルで彼を成長させます。アシジの聖フランシスコがそうでした。十字架の聖ヨハネがそうでした。とはいえ、彼らは、副産物として、被造物の持つあらゆる喜びを十分に理解する最も魅力的な人物となったのです。しかし、人間性の成長は決して彼らの人生の直接の目的ではなかったし、また、彼らは被造物からくる贈り物を自分自身の楽しみとすることもありませんでした。これらの資質は美の源である神にまで彼らを高める単なる踏み切り台に過ぎなかったのです。“己が生命を失う人はこれを得る”】。<sup>13</sup>

他者の言葉によって、また、他者の言葉を求めて生きることは、その他者が大文字で書かれる御方（神）である時、人間の自由を傷つけないだけでなく、むしろ、そのための条件なのです。イエス・キリストほど自由な人はいませんでした、何故なら、イエスほど御父に従順な人はいなかったからです。イエスにつき従うことによって、修道者は、人を命の充満へと導く真の自由の証し人となるように、その従順によって変容されるのです。

**今日、自らの自立性に関心が向かい、自由を侵害されることを嫌い、自立を失うことを恐れるような人々が宣教の対象であることは、めずらしくありません。**

**奉獻生活者は、生きがいを満たすためにほかの方法が可能である**

---

<sup>13</sup> P.J. ホーフエル総長『修道者の従順』回章第9号、1959年5月12日、n. 56。

ことを、その存在そのものによって示します。神が目標であり、み言葉が光であり、み旨が導きであるような生き方です。奉献された人々は、温かく迎え、必要なものを与えてくださる父のみ手に支えられているという確信のうちに、平和のうちにその道を進みます。同じ聖霊に触発された、兄弟・姉妹が共に歩む道です。聖霊は、御父が一人ひとりの心に蒔かれた望みやあこがれを満たしたいと願っておられ、満たす方法を知っておられます。

奉献された者の第一の使命はこれです。すなわち、神の子らの自由をあかしすることであり、その自由は、神と兄弟姉妹とに仕えるために自由であられたキリストの自由にかたどられたものです。さらに、土から人間を造り（創世記 2：7、22 参照）、母親の胎内に人間を組み立てられた（詩編 139：13 参照）神が、奉献された者のいのちを、キリストのいのちにかたどり、新しい、完全に自由な人に形造ることがおできになることを、自らの存在をもって確証することです。<sup>14</sup>

この証しは、今まで述べて来たように、従順が神の愛という“基礎となる”経験に根ざしている場合にのみ、つまり、律法に魅了された詩篇作者が「**あなたによって心は広くされ**、わたしは戒めに従う道を走ります」（詩篇 119：32）と主に向かって述べる言葉が私たちの生活において真実である場合にのみ、可能となるのです。

## 2.2 御父の口から出るすべての言葉に注意深く

大人の従順は、人生がその上に築かれ、また、人生の意味と内容もそこから得られるあの“基礎となる”関係、に基づいています。ですから、これは命令を受ける時だけ動く単なる受動的な態度ではあり得ません。私たちの創立者が言っているように、従順を“不従順ではないこと”と

---

<sup>14</sup> 『権威の奉仕と従順』（Faciem tuam）、n. 15。

しか理解しない人は、従順が何であるかを理解していないのです。<sup>15</sup>

自分の生涯に従順に捧げたのですから、従順な僕は、求められるまでただ待っていることはしません。彼は御主の目、口、手に注目し、自分の主の望みを見分ける熟練者となるまで、絶えず御主の顔に目を注ぎつつ生きていきます。ですから、神のみ言葉への従順により、また、その従順を求めて生きるということは、神のご意思の探求とその識別としての積極的かつ注意深い傾聴によって、自分の生活全体を築き上げることが前提となっています。神のご意思を探求し、耳を傾け、識別することは、従順を生き抜くための本質的要素です。

### A) 探し求めること

主は、もしかするとまだ確信がなく疑問を抱いたまま新しいラビに従い始める最初の弟子たちに、「何を求めているのか」(ヨハネ 1 : 38)と尋ねます。この問いの中に、私たちは他のさまざまな根本的な問いを読み込むことができます。

あなたの心は何を求めているのか？ あなたは何を心にかけているのか？ あなたは自分自身を探しているのか、それともあなたの神、主を探しているのか？ 自分の望みを探究しているのか、あるいはあなたの心を造られた方の望みを探究し、その方が知り、とらえるように、自分の心を満たしたいと願っているのか？ 過ぎ去るものを追い求めているのか、あるいは過ぎ去ることのない方をあなたは求めているのか？ 聖ベルナルドはこのように言っています。「多様性に満ちたこの世界で、神なる主よ、私たちは何に心を向けたらよいのでしょうか？ 日が昇ってまた暮れるまで、人がこの世の労苦に追われるのを私は目にします。ある人々は富を追い求め、ほかの人々は特権を、さらに別の人々は賞賛される満足を追い求めています」。

「主よ、わたしは御顔を尋ね求めます」(詩編 27 : 8)。この言葉は、神の神秘の類いなさとその無限の偉大さ、そして聖なるみ旨の

---

<sup>15</sup> G.J. シャミナード師『従順に関する実際的教訓』1840年5月12日、n. 14 参照。

権威を悟った人の反応です。また、たとえ潜在的で混乱してはいても、真理と幸せを探し求めるすべての人間の反応でもあります。神の探求 (Quaerere Deum) は、絶対的な存在、永遠の存在を渴き求めるすべての人の探求でありつづけてきました。今日、多くの人はいかなる形の依存も屈辱的としてとらえがちですが、被造物という立場そのものが、ある“存在”に依存するということを前提とし、従って、関係性の中にあるもの、超越的な他者に依存するものであることを前提とします。

信じる者は、生ける、まことの神、すべてのものの始まりと終わり、自分に似せて作り出した神ではなく、ご自分にかたどって私たちを造られた神、み旨を知らしめ、ご自分に至る道を示された方を探し求めます。「あなたは命の道を教えてください。わたしは御顔を仰いで満ち足り、喜び祝い、右の御手から永遠の喜びをいただきます」(詩編 16 : 11)。<sup>16</sup>

従順の根底には、生命に至る鍵を持っていないという経験があり、それ故に、その鍵を探し求め、それを他者である御方(神)から受け取る必要があるのです。この意味で、従順は貧しさの姉妹であり、この貧しさにおいて、私たち自身が所有していない糧を探し、乞い求めるよう私たちに強く促すのです。従って、自分はその糧を確かに持っており、従って、安全だと信じきっている者には、この態度は不可能となります。自分はすでに知っている、あるいは、何でも知っていると思っている人、自分の知識に自信があり、独断的で、何をなすべきか誰にも言う必要のない人、このような人は従順という道に入ることは出来ませんし、ましてや、最も要求の厳しい生活の一つであるかもしれない修道生活という厳しい生き方には入れません。私たちは誰でも、自分自身についてあるいは他者に関して、このようなタイプの人についての経験を持っています。これは召命についての初期の識別の間に心に留める必要のあることです。長年にわたる私の初期養成の任務が教えてくれたことは、私たちのドアをノックする候補者に関して、担当者は、人間的な疑

---

<sup>16</sup> 『権威の奉仕と従順』 (Faciem tuam)、 n. 4。

いや動揺よりも“聖なる”安心や確かさの方をもっと恐れねばならない、ということです。志願者を受け入れる際の一番良い質問は、恐らく、「あなたは**何を**探しているのですか？」ではなくて、「あなたは**誰を**探しているのですか？」だと思います。

## B) 耳を傾けること

もしも御主への従順のうちに生きることが可能だとすれば、それは御主がこれまで私たちの一人ひとりと関わってきてくださったし、今も関わり続けておられるからです。御主は人が理解できる範囲の人間的な言葉で関わってくださったし、今もそうしてくださっています。すなわち、聖書、教会生活、歴史上の出来事、マリア会のカリスマを生きる生活、私たちの生活の具体的状況において、更にまた、私たちの心に注がれた聖霊によって私たちの存在の奥底でそうしてくださいます。私たちの神は、探し求めてもらうために隠れておられ、遠く離れた神ではなく、むしろ、私たちを探し求めて直ぐ傍におられる神です。しかしながら、神の私たちへの関わりが効果的なものであるためには、私たちが耳を傾けることが必要条件です。従順という言葉の語源が示すように、従順な人とは“聴く人”のことを暗示しています。

「わが子よ、聞き従え」(箴言 1:8)。第一に、従順は、息子あるいは娘の姿勢です。従順は、親の言うことを聞く子どもだけが持つ、あの聞き従い方です。なぜなら、親は自分にとってよいことしか言ったり与えたりしない、という確かさに照らされた姿勢だからです。それは、信頼に満ちた聞く姿勢であり、子どもはそれによって、自分にとって良いことであるという確信のうちに、親の意思を受け入れます・・・

神なる主にとって、イスラエルは子です。イスラエルは、主が選び、生み、育て、手を取り、抱き上げ、歩き方を教えた民です(ホセア書 11:1-4 参照)。たとえその民がみ言葉に聞き従わず、み言葉を重荷、「律法」としてとらえても、主はその民に — 愛情の最高の表現として — 絶えずみ言葉を語りかけました。旧約聖書全体は、

聞き従うことへの招きです」。<sup>17</sup>

御主に耳を傾ける一段と優れた場は祈りであり、それも私たちの創立者が特に“信仰の念祷、及び、神の現存の念祷”と呼んだようなタイプの祈りです。この祈りを創立者は“神の現存に対する潜心”と定義しています。“この潜心は、魂が出来るだけの注意を払って信仰の光のうちに神を眺めるよう促し、・・・神を眺めることに決して倦むことはありません”。<sup>18</sup> 神との親密な祈りにおいて、神に耳を傾け、神を観想し、信仰に関して私たちの心を吟味することによって、私たちの中に内面的な愛情に満ちた知識が育つのですが、その親密な祈りを通して、私たちは感情と意志の両方のレベルで神と言わば“同調した”状態に入ります。シャミナード師は続けます：「信仰が私たちの中でかなりの進歩を遂げると、私たちの魂は、自分が神の御前にある、また、キリストの聖なる人性の御前にあるという想いに留まることを熱望するようになります。ある意味で、信仰は私たちを神と結びつけます。つまり、信仰は私たちを神との交わりへと導き、私たちの霊を神の霊と、私たちの心を神のみ心と融合させるのです。こうして神の霊の光が私たちのものとなります。すなわち、私たちは物事を神が見るようにしか見ず、神が判断するようにしか判断しません。私たちの先入観は次第に消え失せ、私たちは神の認識に精通した者となるのです。そして、これこそ聖人たちの認識なのです」。<sup>19</sup>

これと同じ意味で、奉献・使徒的生活会省は、権威と従順に関する最近の教令の中で、神のみ言葉についての日々の念祷を強く促しています。

み言葉との愛に満ちた出会いは、いのちへの道、神がご自分の子らを解放しようと望まれる道を発見する方法を示し、神のみ心に適

---

<sup>17</sup> 同上、nn. 5-6。

<sup>18</sup> G.J. シャミナード師『念祷に関する記録』、n. 373。

<sup>19</sup> 同上、n. 377a。



うことがらへの霊的な直感力を養い、神のみ旨を感じ味わう感覚を伝え、忠実にとどまることの平和と喜びをもたらし、あらゆる従順の表現に敏感になり、応じる心構えを持つようにします。福音（ローマ 10：16、二テサロニケ 1：8）、信仰（ローマ 1：5、16：26、使徒言行録 6：7）、真理（カラテヤ 5：7、一ペトロ 1：22）への従順です。<sup>20</sup>

しかしながら、御主に聴くという態度は、み言葉についての念祷や祈りだけに限られるものではありません。御主への従順に生きる者にとって、聴くという態度は、生活全体に浸透しなければならないし、一つのスタイル、つまり、日々の生活の現実を前にした独特な姿勢とならなければなりません。それは、すでに述べたように、これこそ御主が我々に会いに来られる場だからなのです。このように、祈りの中に御主を受け入れ、御主に耳を傾けることは、それぞれ人生の状況や出来事にぶつかっている教会、共同体、それぞれの兄弟や姉妹、貧しい人、病人、受刑者を受け入れ、彼らに耳を傾けることにまで拡大され、それらのことに反映されねばなりません。そうでなければ、祈りだと思われているものは実は祈りではなく、そのような祈りによる見せかけの神の経験は、人騙しにすぎないのです。

最後に、この耳を傾けることはその妨げとなる声や“雑音”を黙らせるための真剣な修徳の努力を必要とすることを忘れることはできません。この点で、マリアニストの伝統である準備徳、中でも、五つの沈黙を、全力を挙げて用いなければなりません。まず私たちが自分自身の言葉を沈黙させないで、どうして神のみ言葉に耳を傾けることができるでしょうか？ 他のことにひどく気を奪われながら、どうして私たちは神に注意を集中することができるのでしょうか？

### C) 識別すること

---

<sup>20</sup> 『権威の奉仕と従順』(Faciem tuam)、n. 7。

神のご意志への従順は聖霊への従順を要求します。聖霊は私たちの個人的、共同体的生活の内的原動力であり、神の国の完全な実現に向けて歴史を推し進めていきます。御主の生涯、死、復活は最終目的地ではなく、むしろ、救いの歴史の新しい時代、聖霊の時代の出発点です。全てのことがもうすでに明らかになり、確立されたものではありません。「言っておきたいことは、まだたくさんあるが、今、あなたがたには理解できない。しかし、その方、すなわち、真理の霊が来ると、あなたがたを導いて真理をことごとく悟らせる。その方は、自分から語るのではなく、聞いたことを語り、また、これから起こることをあなたがたに告げるからである。その方は私に栄光を与える。わたしのものを受けて、あなたがたに告げるからである」(ヨハネ 16:12-14)。

使徒言行録は、初代教会の信徒たちがどのように聖霊に導かれたか、を私たちに示しています。聖パウロは、どのようにキリスト者がもはや奴隷のように外的な掟に支配されるのではなく、子として内部から導かれるのか、を強調しています。「時が満ちると、神は、その御子を女から、しかも律法の下に生まれた者としてお遣わしになりました。それは、律法の支配下にある者を贖い出して、私たちを神の子となさるためでした。あなたがたが子であることは、神が、“アッバ、父よ”と叫ぶ御子の霊を、わたしたちの心に送ってくださった事実から分かります。ですから、あなたはもはや奴隷ではなく、子です」(ガラテア 4:3-7)。御父がイエスに託した計画は、イエスをご自身の霊である聖霊を送る時、完成しますが、この聖霊が私たちを隷属から解放し、私たちを子としての生命と品位を持って生きるようにしてくださるのです。この子としての生命は、もはや外的な掟に単に服従する生命ではなく、むしろ自由で生き生きとした責任を果たすことであり、この責任の遂行において、すべての人は「本当に重要なこと」(フィリピ 1:10)を見分けなければならないのです。この「ほんとうに重要なこと」は、神の子らの行動の益となるもの、どんな時でも父なる神にとって最も喜ばしいもの、神の国の兄弟的生活を共にするすべての人々の間に神の子らの関係を築き上げることに効果的に貢献することの出来るものなのです。

このように歴史は、全体的なものも個人的なものも、決定されてはいません（人間の自由に委ねられています）。聖霊は、インスピレーションによって、息吹きを通して、衝動を通して、私たちを内面から動かし、歴史を完成へと導くべく努めておられます。従って、私たちが聖霊の呼びかけに従って生きるためには、私たちがこの呼びかけを受けとめ、この呼びかけを聖霊からのものではない他の（霊の）動きや内面的な衝動と見分けるようにしてくれる、一種の第六感を発展させる必要があります。私たちは**識別**の専門家でなければなりません。

“識別する”とは、調べること、判断すること、選択すること、弁別（区別）すること、そして、吟味することを意味します。祈りが神のみ言葉に耳を傾けるための特に優れた場であるとすれば、個人的な意識の糾明は識別のための場です。これは良心の糾明ではなくて、心の糾明、つまり、私たちの生活で起こることにその人が普通どう反応するか、そして、その反応は私たちの生活にどんな影響をもたらすのか、について糾明することです。私の内面で現実には起こっているもの、自分が惹かれていると感じるもの、私にとって意味があるもの、について私たちに教えてくれるのは、まさにこの個人的糾明なのです。

この識別は、知性的認識がもたらすものではなく、（内面の動きに対する）心の感受性がもたらすものです。それに、私たちの感受性は、自分で思っているほど中立的ではありません。それだけではなく、理性を操るものでもあります。私たちは自分の感受性（によって生きている者）なのです。私たちは、自分が今このような者だと思っている者でもないし、また、自分が今そうありたいと望んでいる者でもありません。何故なら、そういうことは常に変化するからです。私たちは自分の感受性（によって生きているもの）です。私たちは、懐疑哲学が、神のイメージについて私たちの情緒的生活が及ぼす操作力を、神を私たちの不足や願望の低級な投影だとする点にまで暴露するのを待つまでもありませんでした。すでに、聖イグナチオや他の偉大な霊性の大家たちはこの点を理解していました：「自分の望んでいるものを神が望んでおられると思ひ込

む」。<sup>21</sup> 危険性、すなわち、神の声と自分の声を、神のみ言葉と自分の言葉を混同する危険性を避けねばなりません。

不幸なことに、日々の意識の糾明の実践は私たちの生活から少なくなり、養成過程にある志願者に授けられる一連の実践項目からも無くなっています。しかしながら、この糾明は、靈的生活において、特に、真に責任をもって従順を実践する上で、不可欠です。識別は継続的なチャレンジです。即ち、識別はプログラム化できるものではなく、むしろ、“諸々の靈”に動かされる時に適用する必要があるもの、常に警戒を怠らない態度なのです。あるテーマに関する熟考をプログラム化することは可能ですが、識別についてはできません。私たちは意識し、注意深く、目覚めていなければなりません。「誘惑に陥らないよう、目を覚まして祈っていなさい」。これはイエスが弟子たちに与えた最後の忠告でした。私たちはあまり祈りませんが、それ以上に目を覚ましていないのです。<sup>22</sup>

---

<sup>21</sup> この表現で、私は聖イグナチオの『靈操』にある識別のための鍵となるテキスト、「選定をするにあたって」に言及しています。「良い選択をするにはいつも、私たちの意図がひたすら一つのことだけを目指し、私が造られた目的、すなわち、主なる神への賛美と自分の靈魂の救いのために造られたということだけを見ていなければならない。従って、選ぶものは何であれ、私が創造された目的の助けとなるものでなければならない。また、目的のための手段にその目的を従わせ、適応させるのではなく、手段をこそ目的に従属させるべきである。事実多くの人はず結婚を選び（それは手段であるが）、その後、結婚において神に仕えようとする。神に仕えること、これこそ人生の目的なのである。同様に、まず、聖職の収入を得ることを望み、そのあと初めて聖職において神に仕えることを望むという人もいる。こうなると、この人たちは真直ぐ神の方へ行くのではなく、**神の方が自分の乱れた愛着の方へ真直ぐに来ることを望んでいること**となる。従って、目的を手段に、手段を目的に変え、最初に取りべきものを最後に取ってしまう。と言うのは、私たちがまず第一に目指すべきものは神への奉仕であり（それは人生の目的であるが）、第二に、一層有益であるならば、その目的のための手段、すなわち、聖職の収入を得ること、あるいは結婚することを求めなければならないからである。要するに、そのような手段を取らせたり控えさせたりして私の心を動かすべきものはただ主なる神への奉仕と賛美、及び自分の靈魂の永遠の救いだけでなければならない」（聖イグナチオ・デ・ロヨラ、『靈操』{ホセ・ミゲル・バラ 訳}新世社 1997年、n. 169）。

<sup>22</sup> 「意識の糾明は、会憲では、御主の“われ、すべての人に言う、警戒せよ”とのみ言葉の実践であると見なされています。このみ言葉は、すべての修道者

意識の糺明は、自分の心を内から実際に動かしているものを意識させてくれますが、しかし、意識するだけでは足りません。糺明は十分ではありません。意識の糺明と共に修徳の努力が必要です。修徳の努力は、心の動機づけ、つまり、心を縛り支配し、本当に心を解放し満たしてくれるお方の働きを妨げている“このみ”（認めた、或いは、認めていない）を浄化してくれます。“神を見るのは心の清い人々”だけであるということをお忘れではありません（マタイ 5：8）。<sup>23</sup>

---

に意識の糺明を命じ、それを大切にさせるのに充分です」(1839年の会憲、43条)。シャミナード師は、聖イグナチオの教えに沿って、一般糺明、“特別糺明”と呼ばれたもの、及び、念祷の重要性を力説しましたが、聖イグナチオにとって、意識の糺明は霊操と霊的生活における祈りと同じぐらい重要か、あるいは、祈りよりもっと重要だったのです。(例として)この関連文献の中にある、テレーズ・ド・ラムルス嬢のために考案された霊的生活の計画（『念祷に関する記録』、n. 11）、黙想会のおりの糺明点の紹介（『念祷に関する記録』、nn. 337－353 参照）、あるいは、念祷の実践を指導するときのシャミナード師の考察（『念祷に関する記録』、n. 505）をちょっと参照してください。

<sup>23</sup> この件に関してシャミナード師が述べたことをここで思い出せることは相応しいことです：「世の救い主は、神を見るための欠くべからざる条件は清い心を持つことであることを教えられました。したがって心が清くなければ、最もすばらしい信仰の輝きに照らされることも、魂に何の益ももたらさないでしょう。何故なら、その魂は自分の信仰生活を欲求不満にさせるでしょうし、信仰生活そのものを益々やましいもの、惨めなものとするからです。罪のとりこになっている人は信仰があっても魂をより罪深くより不幸にするだけです。したがってわたしたちのあらゆる努力、あらゆる試練、あらゆる戦いはわたしたちの心の浄化に向けられなければなりません。確かにここにキリスト教の全目的があります。というのは、清い心を持つことは神のみを愛し、神のみを探し求め、全力を尽くして神のみに向かうことだからです・・・」（『念祷に関する記録』、nn. 515－516）。

### III. 共に神のご計画を求める

「イエスは、おん父への従順により、  
世を救い、栄光を受けられた。  
イエスの従順にあずかるため、  
会員は、意志を完全に神にささげ、  
また喜んで

**共におん父のみ旨の実現に努める**人々からなる

共同体並びに本会の一員となる」

(『生活の規則』第 29 条)

『生活の規則』は、この条文によって、誓願の生活に関する第二章の従順の誓願に関わる条項を開始しています。この第 29 条をもって、従順の究極的な弁明の理由が展開されており、また、従順の持つ二つの広がりが見示されています。すなわち、垂直面では、私たちの意志を完全に神に捧げることであり、水平面では、“神のみ旨の実現に努める人々からなる共同体並びに本会の一員となること”です。この回章の中で今まで述べてきたことは全て、基本的には、つまるところ、垂直面についての註釈とも言うべきものです。これから見ていきますように、教会の中の修道者でありマリアニストである私たちの従順にふさわしい特徴を与えるものを私たちの従順から喪わないために、ここで水平面について述べるのが適切かと思われます。

#### 3.1 “共に - 呼び寄せる”(召集する) 従順

全てのキリスト教生活と同様に、修道生活の根底には、神のご意志を求めそれに従うための自らの意志の放棄があり、これは、イエスに倣って御父の救いの計画を具体的なものとする道において私たちに先立って進んだおびたしい信仰の従順の証人たち（ヘブライ 12:1 参照）の群

れに連なるものです。

聖ベネディクトの戒律は次の言葉で始まっています：「子よ、心の耳を傾け、師の教えを謹んで聴きなさい。そして慈しみ深いあなたの父の勧告を喜んで受けいれ、これを積極的に実行に移しなさい。このようにして、無気力で従順さにかける生活を送り遠ざかってしまった方のもとに、服従の労役を通して戻るのです。そこで今、真の王たる主キリストに仕えるために自らの意志を捨て、服従という最も堅固で輝かしい武器をとる者には、それが誰であっても、次の言葉を伝えます」。シャミナード師は「修道生活は、特に人間が自分の意志を従順によって神にささげる不断の犠牲行為である。神である師に倣い、修道者は決して自分の意思を行おうとせず、むしろ、常にただ神のみ旨だけを行う」<sup>24</sup> ということを思い起こさせてくれます。

この意味で、修道者の従順は、誓願の形式を超えた<sup>25</sup> キリスト者の従順の一つの型です。つまり、私たちがここまで考察してきたイエスの従順への参与であり、全キリスト者に共通するものです。修道者の従順は神のご意志を見出し、そのご意志に自らを開くことを依然として捜し求めるのです。それでは、修道者の従順をキリスト者の従順と区別するのは何でしょうか？ どう違うのでしょうか？

修道者の従順は、それが他者と分かち合うという召命に応える従順であり、そして、『生活の規則』が述べているように、この事実により、“召集し” (con-voke)、“結合する” (in-corporate) 従順であるということによって特に区別されるのです。単に一人ひとりの個人的な従順ではありません。そうではなく、これは、教会における同じ特別な召命を受けた

---

<sup>24</sup> F「一般規則」ボルドーのサン・ローラン修練院『指導書』第二巻、n. 246。

<sup>25</sup> 今引用した箇所が続く段落で、シャミナード師は付け加えます：「しかし、その具体的な内容から見て、従順の誓願は、人間的弱さからして、自分の意志を不断に犠牲にするのに十分ではなかろう。なぜなら、それが直接に、本来、拘束するのは、ただ、合法的な長上が明白な命令を与える希な場合のみだからである」(同上、n. 247)。

人たちと分かち合う形で遂行される、集団としての従順に統合された、共同体的な、従順なのです。言うまでもなく、修道生活には個人的で委譲できない召命、“固有の”召命（一人ひとりがその名前と呼ばれる召命）がありますが、しかし、これは、分かち合われる共通の召命の中に刻み込まれています。

キリスト教的従順の中で、修道的従順は固有の性格を持っていますが、それは誓願そのものから来ると言うよりも、むしろ、修道者に独特な神の意志の求め方、それへの従い方にあります。信徒が家庭生活を通して、あるいは、自分が生活している社会の信徒組織への参加を通してそれを遂行するとすれば、修道者は、神に愛され聖霊に導かれた神の国の善のための独特の生き方を実現させるために、自分と同じように、また、自分と共に召された他の人々と一緒になってそれを遂行するのです。召命を分かち合う以上、従順もまた分かち合うのだ、と私たちは言うことができます。

教会内で私たちが一般的に“修道生活”と呼んでいるこの神に愛された生き方は、宣教奉仕に向けた兄弟的交わりを生きる生活であることによって基本的に定義されることとなります。共同体とミッション：修道者は従順によってこの両方**に向けて**“呼び—集められた”（con-voked）のであり、この両者**において**、修道者は従順を生きるのです。同時に、この両者は従順の結果であり、また、従順が遂行される領域なのです。

従順の第一番目の帰結であり最初の領域となるものは、修道者が神のご意志を捜し求め、耳を傾け、識別する、交わりの場である共同生活です。

このような奉獻のあかしは、その特徴である**共同体的側面のゆえ**に、修道生活において特別な意味を持っています。兄弟的生活は、御父の意志を識別して受け入れ、精神と心をつにしてともに歩むための特権的な場です。従順は愛に生かされ、会員たちの多様なたまものと一人ひとりの個性を尊重して、彼らを同じあかしと同じ使



命において一つに結びます。聖霊によって力づけられる兄弟的生活において、各自は御父の意志を見つけるために、他の会員と実りある対話を行います。同時に、彼らは皆、共同体を統括する一人の会員のうちに神の父性の現れを認め、また、識別と交わりの奉仕のために神から授かった権威の行使を認めます。

さらに、教会と社会の前において、共同体における生活は、同じ招きから生じるきずなの特別なしるしであり、人種や生まれ、言語や文化の違いがあるにもかかわらず、その招きに従順であるようにという共通の意志から生じるきずなの特別なしるしです。不一致と分裂の精神とは反対に、権威と従順は、神に由来する唯一の父性のしるし、聖霊から生まれる兄弟性のしるし、そして神の代理となる人々の人間的限界にもかかわらず、神に信頼する人々の内的自由のしるしとして輝きます。ある人々が生活の規則としているこの従順によって、イエスが「神の言葉を聞き、それを守る人」(ルカ 11:28)に約束した幸いが経験され、すべての人の善のために宣言されます。そのうえ、従順を生きる人々には、主に従い、自分の願いや期待を追い求めずに、真に使命を果たすことが保証されます。こうして、わたしたちは主の霊に導かれ、たとえ大きな困難の中にあっても、主の力強い手によって支えられていることを知ることができるのです(使徒言行録 20:22-23参照)。<sup>26</sup>

もしも修道的従順の第一の帰結、最初の領域が共同生活であるとすれば、最後に来るのはミッションです。私がここで“最後の”という語を使ったのは、それが重要性で劣るという意味ではなく、むしろ正反対です。何故なら、ミッションはまさに召命が指し示す目標だからです。

修道生活の従順は同時に、キリストに倣うことと彼の使命に与かることでもあります。それはイエスがなされたことと、今日の修道

---

<sup>26</sup> 『奉献生活』(Vita consecrata) 1996年3月25日、n. 92。

者が置かれている状況で彼ならばそうするであろうことを行うように導きます。実際、修道者は、自分の会の中で権威を持つ者も持たない者も、使命に言及することなしには命令することも従うこともできません。修道者が従順するときは、この世を救うためになされたイエスの従順に自分の従順を継続させるのです。これに反して、権威の行使あるいは従順の実践において、妥協とか外交的解決、あるいは圧力とか何らかのこの種の人為的適応を加味したものは何であれ、修道生活の従順の根本的な動機と矛盾します。それは従順が、たとえそれが重荷であろうともイエスの使命遂行に自分を従事させ、それを現時点で実行するものだからです。<sup>27</sup>

### 3.2 修道会のカリスマ – 神への従順の媒介

修道者が応えた固有のカリスマは、その修道者が召されている共同体とミッションを決定します。修道者は、修道生活への“一般的な”呼びかけを受けるものではありません。呼びかけは抽象の中にではなく、種々の具体的な姿で実現している修道会のカリスマの中にあります。御主はより具体的な特定なしに、信徒を修道者になるようにと召すことはありません。御主は信徒をフランシスコ会員、カルメル会員、イエズス会員、・・・、私たちの場合であればマリア会員、となるようにと召されるのです。御主の呼びかけへの“はい”の中に含まれる従順は、ですから、またそのものとして、カリスマへの従順なのです。このカリスマは、風、刺激、神からの呼びかけのように、教会の中に湧き上がり、御主の意志を表現するのです。創立者たちは聖霊の靈感を通して直接に御主からそれを受けます。それ以外の私たちは、教会によって承認され、修道会の中で日々具体的に生きている『生活の規則』を通して受けとります。

教会のなかにはたくさんの修道会があり、それぞれは性格を異

---

<sup>27</sup> 奉獻生活者省『修道会における養成の指針』(Potissimum institutioni) 1990年2月2日、n. 15。

にしている（『修道生活の刷新・適応に関する教令』（*Perfectae caritatis*）7, 8, 9, 10 参照）。各修道会は聖霊が「卓越した」働きをとおして呼び起こされた賜物として、また教会ヒエラルキアから真正なものとして認められた賜物としてその召し出しを身に帯びている（『教会憲章』（*Lumen gentium*）45；『修道生活の刷新・適応に関する教令』（*Perfectae caritatis*）1, 2 参照）。

創立者のカリスマ（『福音のあかし』（*Evangelica testificatio*）11）は一つの「聖霊体験」であり、常に成長してゆくキリストのからだのうちにあつて創立者の弟子たちが生き、守り、深め、常に発展させてゆくべく与えられたものということができるであろう。「教会が修道会に固有な性格を大切にし、育てている」のはこのためである（『教会憲章』（*Lumen gentium*）44；『教会における司教の司牧責任に関する教令』（*Christus dominus*）33；35, 1；35, 2 その他参照）。このような「固有な性格」は会に固有な聖性と使徒活動のスタイルとも関係しており、このスタイルが客観的な特徴を表すはっきりした伝統ともなっている。

発展と教会刷新を特徴とするこの時代に、各修道会はそれぞれのアイデンティティーを保ち、それをあいまいなものとしないうように心がけることが必要で、修道者が会の性格に固有な活動様式を十分考慮しない結果、彼らの姿が教会の生活のなかであいまい不明瞭なものとなってしまうことがないよう努めていなければならない。<sup>28</sup>

---

<sup>28</sup> 修道者・在俗会聖省－司教聖省 『教会における司教と修道者の関係についての指針』（*Mutuae relationes*）1978年5月14日、n. 11。

下記のもう一つのより新しい文は同じ考えを繰り返して述べています：「さらに、奉獻生活者は、聖霊によって呼び起こされ、教会によって認証された「福音的計画」、あるいはカリスマに基づく計画のうちに、従順なキリストに従うように呼ばれています。教会は、修道会というカリスマに基づく計画を承認することによって、その計画にいのちを与えるインスピレーションと、制御する規範が、神と聖性を探求する道を提供するものであることを保証するのです。したがって、会則や生活のあり方にかかわるそのほかの指針もまた、主のみ旨を仲介する手段になります。人間的な仲介でありながら権威があり、不完全でありながら同時に義務となるもの、一日一日、そこから出発する起点であり、そしてまた、惜しめない創造性豊かな力強さをもって、神がすべての奉獻生活

修道生活への召命はカリスマを通して生じます。カリスマは修道者に神のご意志をはっきりと示し、それを受肉させる方法を定めます。カリスマは修道者の共同生活の生き方と同様、ミッションを遂行する方法をも具体的に示してくれます。このようにして、カリスマは修道的従順をあらゆる不明瞭さと曖昧さから守りつつ、それを受肉させてくれるのです。

この原則は、個人的召命を識別する上で非常に重要です。この原則のおかげで、召されていると感じる者は、この呼びかけが真実のものであるかどうかを確かめる客観的な原理を持つこととなります。呼びかけとそれを受ける人の間には、ある種の“調和”がなければなりません。ある人が自分は御主からこの修道会に呼ばれていると感じるその修道会固有のカリスに対して無知または無関心であること、その修道会のカリスマでないものを求めたり探したりすること、その修道会の持つ共同体やミッションの固有の様式を生きるために要求される個人的資質を欠いていること、これらは全て、呼びかけられていると思っているその召命が想像上のものにすぎないという明白なしるしです。

しかし何よりもこの原則は、召命を一旦識別してからは、その召命に含まれる体験そのものを深めるために重要です。修道誓願は御主の呼びかけに対する“はい”という一言の中にこの体験全体を含んでおり、従って、カリスマに対する従順の誓約も含んでいるのです。私たちの生活とミッションのまさにその根底にあるこのカリスマに対する従順なしには、神のご意志は私たちの生活の中で実現されないことになってしまいます。私たちは“マリア会の『生活の規則』に従って”、教会の中で、公けに、御主に“はい”と誓う、ということを忘れてはなりません。マリア会固有の生活とミッションに全体的に従うというこの約束において、私たちは従順の誓願を含む修道誓願を宣立するのです。

---

者の上に「意志」されるあの聖性に向けて前進するための起点でもあります」  
(『権威の奉仕と従順』 (Faciem tuam)、n. 9)。

マリア会の場合、ご存じのとおり、私たちの修道誓願には堅忍という特別の誓願が含まれています。この誓願によって、私たちはその奉獻がマリアニスト・カリスマに対する従順の行為以外の何ものでもないことを明確にしています。堅忍の誓願により、私たちはマリア会が宿しているカリスマを携えて生涯マリア会に身を捧げることを誓約するのであり、このようにして私たちは御主に従っていくのです。私たちの創立者がこの誓願に与えたマリアとの契約 (alliance) という理解は、従順のこの側面からその意味を得ているのです。

### 3.3 分かち合う従順、“共同 - 責任”

ここまで来ますと、私たちは先に引用した『生活の規則』29条の後半：「喜んで、共におん父のみ旨の実現に努める人々からなる共同体並びに本会の一員となる」という言葉の持つ広がりや意味をより良く理解できます。私たちが直ちに理解するのは、このように理解された従順は受動的なものであってはならず、積極的なものでなければならない、ということです。修道的従順は他者から命ぜられたことを単に実行することにあるのではなくて、神のご意志を共同で探求することに積極的に参与することにあります。

従順を権威との関係という文脈に限定して提示していたことは、過去において、この原則の理解を助けてはくれませんでした。既に見てきたように、私たちからそれ程離れていない時代において、特に一つの修道会の歴史全体を考えると、従順に関わる問題は、あたかも数名の者だけが神のご意志を見出す使命を独占的に持っていて、他の者には単なる盲従の役割だけが残されているかのように、一方では権威の正当化、他方では服従への奨励という捉え方がなされてきました<sup>29</sup>。この従順の

---

<sup>29</sup> すべての人の参加に賛成するような権威の行使を求める声があったにも関わらず、第二バチカン公会議は『修道生活の刷新・適応に関する教令』(Perfectae caritatis) の 14 番において、このようなアプローチを完全には避けませんでした。教会の教導権から出されたそれ以後の他の文書は、周知のごとく、第二

問題が間違った観点（今、上でこのことを取り扱ったところですが）から取り扱われたということではなくて、その観点が、修道的従順を正しく理解し、この従順が包含するものをすべて把握するには不十分だったということです。召命は共同体的なものであり、私たちは全員、今、ここという具体性において神が私たちを招こうと望んでおられるものの探求に取り組んでいるのです。この探求は任務や他の様々な方法（会議、集会、評議員会、総会・管区会議、上長、上長補佐、評議員、など）を通してなされますが、各自はこの探求そのものへの責任を分かち合っており、誰一人として自分はそれと関わりがないと考えることはできませんし、あるいは、そうすべきでもありません。

この『生活の規則』の原則を私たちが自分のものとするには、長い熟考の道のりが必要でした。この事実を思い起こすことは、解釈学的な興味からだけではなく、また何よりも、私たちの生活についての関心という面からみて有益なのです。この長い熟考の道のりは私たちの生活に反映されてきたのでしょうか？ それはどう実行されてきたのでしょうか？

従順における共同責任は、第二バチカン公会議の教会論の一つ実りとして、ごく最近の歴史に現われました。私たちに関して言えば、それは、現在の『生活の規則』の先駆けである、公会議を反映した 1971 年の総会です。「現代世界において、権威と従順についての理解は進展してきた。このような進展によって、その反響が修道生活に及び、様々な困難な事態をひきおこした・・・しばしば長上に帰せられた伝統的な役割と、第二バチカン公会議後に広く受け入れられた団体指導制と補完性の原理を調和させようとする時にも、困難な問題が起こってきた」。<sup>30</sup>

*団体指導制* (collegiality)、*補完性* (subsidiarity)：この二つは新しい言葉、新しい概念であって、従順という体験の中にもうまく統合される

---

バチカン公会議の共同責任の原則と共同的な探求をより発展させました。(『権威の奉仕と従順』) (Faciem tuam)、n. 12 参照)。

<sup>30</sup> 1971 年総会『マリア会総会議一宣言』宣言第 4、n. 23 (nn. 23–30 参照)。

ために、(従順の) 新しい形だけでなく、新しい“メンタリティー”を要求するのです。「私たちの生活の規則に示されているように、権威の本質は変わらなかったにも拘わらず、権限の分散と補完性の実行が実施されると、管区本部独自の役割についての疑問が提起されることになります。特に今の状況は、管区本部が以前よりももっと力強く必要なリーダーシップの役割を果たすよう激励することである、と総会は確認する。リーダーシップの概念は、何ら、権威の概念と対立するものではない。むしろ、リーダーシップは権限を行使する一つの形なのである。管区本部は説得、激励、調整、刺激、評価、および、模範によって、創造的なリーダーシップを行使する」。<sup>31</sup>

活性化 (animation) も従順に関して総会の用語に取り入れられるようになったもう一つの新しい概念です。総会文書の一つを“活性化による統治”<sup>32</sup> にささげた 1976 年の総会の言葉の中で、「活性化するとは基本的に生命を与えることを意味する。グループに命を与えるためには、命令するだけでは不十分である。特に修道者が、命令することを他者の行動を規制する掟を与えるものと理解したり、あるいは、外部から来る命令を遂行するよう他者を強制することと理解するならば、不十分です。活性化によって権威を遂行するとは、また、説得、激励、刺激、評価、そして何よりも模範によって内的な動機に訴えることを意味します」。<sup>33</sup>

権威の遂行にあらためて焦点を当てたこの新しいアプローチが、権威の基礎においてではなく、その実践において、この権威に関する危機を引き起こしたことを否定することはできません。権威をこのように理解することは容易ですが、理解したとおり実行することは困難です。実行するためには並ではない資質と能力が必要とされます。困難に直面して出てくる傾向は、権威の遂行を放棄することです。そしてまた、もしもこの傾向が、権威が遂行されて始めて実行に移されるような、未だに受

---

<sup>31</sup> 同上、宣言第 5、n. 3。

<sup>32</sup> 1976 年総会、宣言 E、nn. 101–124。

<sup>33</sup> 同上、n. 105。

動的な従順の体験に固執する他の傾向と重なれば、結果は、私たちの修道生活にとってかくも本質的なこの領域における体験に大きな空白が生じることになります。この空白は修道生活の特徴づけるはずの預言的、宣教的ダイナミズムをそれから失わせる原因となります。というのは、このダイナミズムは、今、ここでの私たちの生活における神のご意志の探求とその実践、つまり、私たちの従順のダイナミズムと本質的に結びついているからです。

繰り返しになりますが、この空白から抜け出すためには、私たちは、従順の実践を権威との関係という狭い領域から解き放ち、私たちの共通の召命の領域に位置づけねばならないのです。従順はこの私たちの共通の召命という領域で考えられなければならないし、そこに真の基礎を見出さなければなりません。全てが権威の遂行に懸っているではありませんし、全てが修道者たちの服従に懸っているわけでもありません。私たちの従順のダイナミズムは放棄と犠牲の精神を要求しますが、これが従順を育むものではありません。むしろ、御主からの（従順の）共同体的な召命に対して真心から首尾一貫して応えようとして熱心に分かち合うこと、これが真にいのちを与えるものなのです。

『生活の規則』は正にこのアプローチを取っており、その第二巻第7章の序文において、それを展開しています。私はここでそれを全て繰り返すつもりはありませんし、コメントする時間を取りたくもありません。7-1条から7-8条に戻って、それらの条文を注意深く呼んでいただければ十分です。これらの条文が、どのように共同責任に対して、また、統治における参加に対して、繰り返し私たちに呼びかけているか、つまり、マリア会の方向づけへの呼びかけをしているか、を読み取ることができるでしょう。こうして、「**共通の目的、会の機構、同じ召命で結ばれた会員の相互作用**、長上とその補佐、そして最後に、独特なかたちで各修道者、など、これら多くの要因がそれぞれ固有の貢献をなすことができる」<sup>34</sup> のです。

---

<sup>34</sup> 『生活の規則』第7-7条。



## 共同決定に関するノート

「共同体の生活にとって重要な方針は、  
長上の指導のもとに全員で  
祈りと討議によって  
神の意志を知るよう真剣に努力した後に  
これを決定する」(『生活の規則』第42条)

「参加とは、できる限り全員が、決定の準備、決定、  
実施および評価に進んで協力することである。  
対話と共同識別は、最高の参加を実現する  
有効な手段である」(『生活の規則』第7-4条)

『生活の規則』のこの二つの条文は、共同体の生活に影響を及ぼす決定をする際の全員の参加を求める明確な呼びかけです。これは、今まで私たちが述べてきたように、従順の義務とそれを共同体験するための重要な実践とに関わっています。しかし、従順の共同体験はまたデリケートな実践でもあって、私たちはその関わりの持つダイナミズム(dynamic)には十分注意を払う必要があります。この実践が意図した効果をもたらすためには、私たち全員に相当な注意と関心が必要とされる、と私は思います。言うまでもありませんが、ここで述べる決定とは、生活やミッションに影響を及ぼす一定の重要性を持った決定のことであって、あまり重要ではない個々の問題のことではありません。

1. 先ず、この共同決定をある種の“議会的”プロセスと混同してはなりません。議会においては、多様な利益やイデオロギーといった動機を抱えたグループや党派が衝突し、対決します。思い通りにするために、つまり、賛成票という賞を得るために、最も重要なのは弁論の力、すなわち、論証する能力、巧みに人をあやつることさえする能力です。この種の力量は、対決ではなくて交わりという原則に基づいている共同生活とは相いれません。更に、この種の力量は、

福音的交わりの正に中心であり要である弱者を組織的に除け者とするので、福音的交わりを根底から傷つけてしまいます。この種の力が共同生活とは相いれないということは、私たちの体験から十分に明らかです。自分は人よりも劣っているとか、あまり教育を受けていないとか、あるいは、討論のプロセスのような領域であまり能力がないと思いついておられる兄弟たちの引込み思案な沈黙に立ち会ったことはなかったでしょうか？ いわゆる“大物”や“有力者”が数多くいる共同体において、これらのプロセスが独特な困難を作り出しているというのは間違いでしょうか？ 交わりの原則は他のすべてに優先すべきものです。この原則を保護するためには、時には、各兄弟との個人的関係を通じて交わりを保証することができる上長の権限に最終決定を委ねるために、時として横暴である投票にそれを委ねないことが必要かもしれません。兄弟たち一人ひとりが、自分は受け入れられ、耳を傾けてもらっている、と感じるようであればなりません。

2. 答えを探求するに当たっての相互作用を意味する真の対話の雰囲気保証されなければなりません。このことは一人ひとりが“答えを探求する”プロセスに入ることを前提としています。何故なら、各人は自分が全ての真実を知っているのではないこと、そして、自分を啓発してくれる他者を必要とすることを確信しているからです。同様に、この相互作用が起き得るためには、自由と信頼の雰囲気が保証される必要がありますが、この雰囲気が自分もこのプロセスに貢献しようと望ませ、これらの貢献を積極的なものにするのです。もし自分で気づいていない目的に動かされた兄弟がいたり、あるいは、自分の意図が批判されたり先入観を持たれていると感じる兄弟がいれば、信頼と自由は侵害されます。この自由と信頼の雰囲気を作り出すことは、私たち一人ひとりの、また、私たち全員の任務です。もしたった一人でもこの雰囲気を侵害すれば、全員が妨害されます。たった一人の態度によってグループ全体の対話がどれほど妨害されるか、私たちは経験で知っています。

3. 理想としては、すべての共同で行う決定のプロセスが本物の“共同体の識別”であることでしょう。しかし、常にそうだとはいりません。上述したように、識別は、動機づけという情緒的領域に基づいており、単に“理屈”という知的領域だけに基づくものではありません。“理屈”は客観的、概念的な秩序であり、一方、“動機づけ”は、理屈も含みますが、情緒的な面も含みます。決定のプロセスにおいては、決定が良いものとなるように、理屈は必要であるし、示されなければなりません。しかし、何よりもまた、決定の背後にある動機づけが浄化されていることが明らかになることが必要なのです。識別のプロセスは、パスカルが何回も言っているように、(理屈ははっきりしているのに)“理性が知ることがない”ものの領域、即ち、“心の理屈”の領域に入らなければならないという事実が、このプロセスを本当に一筋縄ではいかない難しいものにするのです。これらの“心の理屈”を明るみに出し、更に、相互作用による浄化に付託することはかなりの人間的、靈的な成熟を要します。<sup>35</sup>しかし、この困難さの故に私たちがこのプロセスに入るのをためらうようなことがあってはならないのだし、私たちは、決定プロセスの度ごとに真の識別に一步一步近づくことを、常に目標として持つことができるのです。共同体における兄弟的生活についての『教書』が述べているように、「共同体による識別は、容易ではなく、自動的でもないとしても、かなり有効な処理方法です。なぜなら、人間的な能力、靈的な知恵、そして個人的利害からの離脱が要求されるからです。これが信仰と真剣さをもって実践される所では、兄弟的生活と使命の善益のために必要な決定が下されるためのより良い条件を、統治職に提供することができます」。<sup>36</sup>

---

<sup>35</sup> 「この識別の過程には、時として困難が伴う。しかしながら、この識別方法は会員が人間的に成熟し、同修者を通して語られる主に心を開くにつれて成果をあげるようになる」(『生活の規則』第42条)。

<sup>36</sup> 奉獻・使徒的生活会省『共同体における兄弟的生活』(Congregavit nos in unum Christi amor) 1994年2月2日、n. 50。



親愛なる兄弟の皆さん、変化と探求のこの時代にあって、聖霊に素直に従い、御主への従順に生きることは、以前にも増して繰り返し強調すべきことです。神のご意志を探し求め、そのご意志に無条件に自分を委ねることは、私たちにとって本質的なことです。全ての新しい創造は御主から来ますが、しかしその実現のため、御主は、私たちがマリアと共に「お言葉どおり、この身になりますように」と言うのを期待し続けておられます。この考察が、マリアと共に喜んで従順を生きようとする私たちの刷新の助けとなりますよう祈ります。

人々の救いのためマリアの子となった神の子、  
イエス・キリストにおける皆さんの兄弟、

マリア会総長  
マヌエル J. コルテス, SM

ローマ、2009年4月12日  
主のご復活の祭日